

RADに関するQ/A事例

2019/6/18現在

はじめに	
<p>地域防災コミュニケーションネットワーク「Regional Alert DIRECT」は、国が喫緊の課題として推進されている情報伝達手段の多重化対策として、『既設の伝達手段の弱点を補い合いながら一人でも多くの住民に情報を届ける』ことを目的に開発した防災放送ソリューションで、既設の伝達手段にとって代わるものではありません。</p> <p>本システムは、多くの人が所持するようになったスマートフォンを放送受発信機として活用することで、『防災行政無線放送が聞こえない』という住民にはそのまま放送を届けることができ、さらに、高価と言われる戸別受信機の投資も最小限にとどめられるなど費用対効果でも期待されます。</p>	
1)	<p>音声放送のメリット(有効性)は？</p> <p>住民に危機感を持てるよう切迫したメッセージを発信するには、音声放送以外にありません。音声放送は文字情報と異なり、「音声の強弱、反復、強調」と云った話術で、情報発信者の危機感、切迫感、感情までも確実に住民に伝えることができます。</p> <p>災害が起こるたびに被害拡大の原因の一つに「防災行政無線が聞こえない」と云った問題が必ず取りざたされますが、先の西日本豪雨災害ではそれに加え、自治体が住民に避難を呼び掛けたにもかかわらず、避難行動に移す住民が少なく、多数の死者や安否不明者が出たことが特徴で、行動につながる情報の伝達方法に課題を残しました。</p> <p>専門家はこうした状況について、住民のほとんどは早く避難することの大切さを感じていながらも、都合の悪い情報を過小評価してしまう「正常性バイアス」が働いたのではと分析しており、自治体が住民に避難を呼び掛ける際、『危機感を持てるよう、切迫したメッセージを伝えることが減災の鍵になる』と指摘しております。</p>
2)	<p>ライブ放送のメリット(有効性)は？</p> <p>ひとたび災害が起こると状況は刻々と変化し、それに伴い住民へ発信する情報の内容も分単位、秒単位で変わってまいります。そうした状況下において、住民へよりの確かな情報をすばやく伝えるには、録音放送やメール配信をしていたのではとても間に合いません。</p> <p>情報伝達のスピードは命に直結します。本システムは、いかなる状況にあっても正確で的確で有用な情報を、柔軟かつ臨機応変に発信できるライブ放送による情報発信を採用しております。</p>
3)	<p>防災行政無線放送の音声放送との違いは？</p> <p>本システムの音声放送は防災行政無線とは異なり、音の反響や共鳴で音声が重なると云ったエコー現象を考慮する必要が無いので、間隔をあけてゆっくりと放送する必要がありません。通常の会話スピードで放送できることから「大量の情報をリアルタイムで発信」できます。</p> <p>※自動転送放送は、防災行政無線の放送がそのままリアルタイムで流れます。</p>
4)	<p>音声放送が流れるまでのタイムラグは？</p> <p>通信状況にもよりますが、1秒以内のタイムラグが生じる程度です。</p>
5)	<p>エリア別に放送を流せないか？</p> <p>本システムは、テレビやラジオと同様に一斉放送となっており、エリア指定による放送はできません。</p> <p>なお、放送開始はプッシュ通知で案内され、どこ向けの放送なのか、誰向けの放送なのか、放送の内容により該当する視聴者をプッシュ通知のショートメッセージで案内できる仕組みを用意しています。</p> <p>これにより、例えば表示された該当エリアが自身に直接関係ないエリアであったり、両親や身内の居住地区であったり、会社所在地であったり、これから向かう先であったりした場合でも、リアルタイムで放送を視聴し行動することができます。</p>
6)	<p>過去の放送(音声/文字放送)を視聴できないか？</p> <p>災害時では、刻々と変化する状況に対し、住民へ発信する情報も分単位、秒単位で変わってきます。そうした状況下において、古い情報を持たせたことで住民が誤って古い情報を視聴し、そのことが二次被害、三次被害につながるよう、常に最新の情報しか持たないようになっています。</p> <p>例えば、最初に放送した避難所Aが危険な状態になり避難所Bへの誘導を放送したところ、最初の避難情報を聞いてしまい、避難所Aに避難してしまったと云うことが起らないようにしたものです。</p>
7)	<p>被災者投稿機能(ヘルプメッセージ)の必要性と有効性は？</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 災害時に電話回線が制限されたり不通になった時でも、インターネット回線が機能していれば、住民は被害状況やSOSをスマホから投稿することができます。 ○ 災発時では住民からの電話が殺到するため、職員は要件をメモに写し関係部署に伝達するのが一般的ですが、電話対応等で混乱する状況下にあっては、聞き取りミス、記入ミス、メモの紛失、伝達の未達、対応状況の報告漏れなど、初動対応に支障をきたす恐れがあります。住民からの投稿(生の声)を組織横断的に一元管理することで、住民からの電話の集中と対応負荷を軽減させ、情報伝達の人的ミスを未然に防ぎ、初動対応を迅速かつ確実に行うことが可能になります。

8)	ヘルプメッセージを採用した場合、投稿に対応できなかったとき問題視されるのでは？ ヘルプメッセージを使用しない場合、災害発生時での住民からの問い合わせ、通報、連絡は、従来通り全て電話で受けて対応することになり、上記でも記述したように、聞き取ったメモの不備、メモの紛失、伝達の未達、対応状況の報告漏れなど対応時における人的ミスも問題視されることから、ヘルプメッセージを活用いただいた方が総合的に判断しても合理的かつ有効と考えます。
9)	平常時ではヘルプメッセージを本来の目的以外の目的で利用されてしまうのでは？ ヘルプメッセージは、役所が災害状況を見て投稿機能が必要と判断したとき機能を有効にできる仕組みになっています。(有効にしない限り投稿ボタンは表示されません)
10)	ヘルプメッセージを普段使っていないと、いざというとき投稿方法が分からないのでは？ 役所がヘルプメッセージの機能を有効にしたとき、投稿方法を音声放送と文字放送で繰り返し説明頂くなどの方法が取れます。 放送例)「被災に関する通報は、今視聴しているアプリの画面にある、緑色の”救助要請”ボタンを押して投稿してください！ 繰り返します、・・・」
11)	高齢者が多いがどうしたらよいか？ 少子高齢化が進む中、特に「高齢者」については、スマホによる情報伝達は利用してもらえないのではと心配される自治体も多いですが、いろいろと話を伺いますと、前期高齢者(65歳～74歳)よりも後期高齢者(75歳以上)が問題視されており、加えて後期高齢者でも家族と世帯を共にしている、または、何らかの形で介護を受けている後期高齢者は特に心配はなく、結局のところ、単身高齢者もしくは二人住まいの高齢者など自助力が困難な後期高齢者について何らかの対応をとる必要があることが分かってまいりました。 従いまして、スマホでの情報伝達が困難な後期高齢者や希望者についてのみ戸別受信機を配布するようにすれば、戸別受信機も全戸配布に比べ少ない投資で配布可能との話しになるケースがあります。 因みに、単身高齢者等の後期高齢者の世帯にあっては、地域性もありますが、地方ほど近所間のコミュニティがしっかりしており、いざというときの共助体制が確立していることから、近所住民にあってはスマホを放送受信機に確実に防災行政無線の内容が伝われば共助対応にも効果が出るものと考えます。
12)	在留外国人への情報伝達はどうしたらよいか？ 在留外国人にあっては、母国会などのコミュニティに入会されていることが多く、LINEなどSNSで母国語で即座に情報共有されているとのことですので、本システムでは多言語対応はしておりません。因みに、あらかじめ用意した文字や音声の多言語放送を流せないかとの要望も中にはあり、もちろん可能ではありますが、母国会等のコミュニティのSNS情報の方が内容が具体的なため、そちらからの情報取得が主になるとのことのようです。
13)	音声→文字／文字→音声の自動変換はできないか？ 音声文字変換技術は既にありますが、地名、河川名、街道名などの固有名詞で誤変換を起こすことが多く、特に防災放送に関しては、例えば避難所への誘導などで避難所名など誤変換情報が流れることは二次災害につながる危険性が高まることから、本システムでは対応させておりません。
14)	緊急放送以外に平常時に各種行政関連情報は流せないか？ Jアラートや防災行政無線放送の自動転送放送の他に、手動で音声放送や文字放送を流せますので、平常時には各種コミュニティ関連情報を随時放送いただけます。
15)	プッシュ通知や放送の音量を自動的に大きくできないか？ 防災ラジオや戸別受信機と異なり、受信機の近くに人が居ないことを考慮する必要がないことから、音量を自動的に大きくする仕組みにはなっていません。
16)	利用者は常時アプリを使ってないと操作を忘れてしまうのでは？ 一度当アプリをダウンロードいただければ、あとは忘れていただいても構いません。 放送が流れると、プッシュ通知メッセージが表示されますので、メッセージをタップし、視聴ボタン(スタート)をタップするだけで放送を視聴できます。
17)	「ブラックアウト」になったらシステムは機能しないのでは？ 庁舎がブラックアウトになった場合、防災行政無線設備の停止と連動して自動転送放送の機能は止まりますが、スマホの放送機能はブラックアウトの影響を受けることなく機能継続します。 ★ 音声放送、文字放送、ヘルプメッセージ、登録制防災メール配信が継続利用いただけます。
18)	システムが稼働するクラウドサーバーはどこにあるのか？ 本システムは、さくらインターネット社が運営管理するクラウドサーバー(当社専用契約サーバー)にて運用しておりますので、災害にも強く安定して安全にご利用いただけます。

19)	<p>スマホの電源が切れている場合、自動的に電源を入れて放送を流せないか？</p> <p>電源が切れているスマホを本システムから自動的にONにすることはできません。そもそもスマホは、本来電源を切っている場合が極めて少ないことから、本システムではシステム開発の企画段階から技術的な実現性を含め検討してきておりません。</p> <p>また、仮に本機能が技術的に実現可能だとしても、スマホの電源を切っている人は、例えば病院内、映画館内、会議中、試験中等々、電源を切らなければならない状況下におかれていることが想定され、自動的に電源を入れることは別の問題を誘発しクレームの対象になりかねないことから非対応とさせていただきます。</p> <p>最近では、防災用FMラジオやテレビなどで、自動的に電源が入るものも出てまいりましたが、スマホとこれら製品とは利用環境や利用状況が全く異なるものであることをご理解いただいております。</p> <p>なお、放送の開始はプッシュ通知で案内されますので、視聴可能な時に視聴いただけます。</p>
20)	<p>アプリを自動起動させ音声を流せないか？</p> <p>上記に同じ。</p>
21)	<p>ガラケーに放送は流せないか？</p> <p>本システムはスマホ対応アプリのため、ガラケーへ放送を流すことはできません。</p> <p>但し、本システムでは、「登録制防災メールとの自動連携機能」を用意しており、既設の登録制防災メール配信システムと自動連携し、ガラケーにメール配信出来ます。</p> <p>※登録制防災メール配信システムによっては連携できない場合があります。</p> <p>※防災メール送信文書入力の手間は起こりません。</p>
22)	<p>戸別受信機などスマホ以外の受信機器にも放送を流せないか？</p> <p>本システムはスマホ対応アプリのため、他の受信機器へ放送を流すことはできません。</p>
23)	<p>他の防災アプリに比べ高価だが何が違うのか？</p> <p>一般に出回っているアプリは、ホームページ技術を活用したポータルアプリであるのに対し、本システムはインターネット放送技術による放送アプリです。</p> <p>大きな特徴は、ポータルアプリが発信する音声情報はオンデマンド配信（録音配信）であるのに対し、本システムはライブ放送を実現。録音の手間や煩雑な操作をすることなく即時情報伝達が可能です。</p> <p>また、ブラックアウトで庁舎内の主要な情報伝達手段が機能不全になっても、場所を問わずスマホから一斉放送を継続できる最高度のICTを搭載しております。</p>
24)	<p>『緊急防災・減災事業債(緊防債)』の適用対象になるか？</p> <p>本システムは、総務省自治財政局財政課が平成31年1月25日付け事務連絡で公表した「平成31年度の地方財政の見通し・予算編成上の留意事項等について」の別紙第3(予算編成上の留意事項)28項(5)(6)(7)で謳われている、「J-アラートに係る情報伝達手段の多重化の整備に該当し、緊防債の対象となります。(消防庁へ確認済み)</p>